



# Panique

1959. 4~5

## 上映映画解説

No. 59

### パニック Panique

仏フィルム・ソノール 1946年作

原作……………ジュール・シムノン  
脚色……………シャルル・スパーク  
監督……………ジュリアン・デュヴィヴィエ  
主演者……………ミッシェル・シモン、ポール・ベルナル、ヴィヴィアンヌ・ロマンス

ジュリアン・デュヴィヴィエ  
と「パニック」

清水 晶

かつて新宿の名画座でジュリアン・デュヴィヴィエ特集の名のもとに我が国に輸入された彼の作品のほとんど全部を逐次上映、そのときの記念帖をフランスのデュヴィヴィエのもとへ送って、たいへんに喜ばれたことがあった。アメリカ映画と違って、戦前の彼の作品のプリントが大部分そっくり残っていたからこそ、こうした催しも出来たわけだが、フランスから遙か離れた極東の一角日本に、彼がこんなに人気があるとは、デュヴィヴィエ自身も思っていなかったかもしれない。

例の有名なルナルの「にんじん」の映画化で、彼の名が我が国で一躍有名になってからこのかた、彼ほどたくさんの作品が輸入されて、彼ほど長く圧倒的な人気と信用を保ち続けて来た監督はあるまい。

巨匠と呼ばれる人にしては珍しく、精力的で多作家の彼は、次から次へと作品を送り出したが、それがまた輸入するかしないか迷う余地のないほどの力作揃いで、結局、トーキーとなつてからの彼の作品で、我が国で封切られなかったのは、「にんじん」前後のトーキー初期に三本と、戦争直後に二本あるだけである。

ところで、今度上映される「パニック」は、我が国で普通いう意味の封切のルートに乗らなかったこの戦争直後の二本の中の一本である。作品の質が落ちるからでは決してない。ヨーロッパ映画に対しては極度に窮屈な、戦後の輸入制限にたたられて、一年一年とくり越しているうちに、遂に公開の機を失したまま、東和映画から国立近代美術館フィルム・ライブラリーに寄贈されたのである。

この映画が作られたのは一九四六年。故国フランスから戦火を避けてアメリカに行っていたデュヴィヴィエが、平和の回復と共にフランスに舞い戻った戦後第一作である。

原作はフランスの推理作家としてあまりにも有名なジュール・シムノン。彼の原作でデュヴィヴィエによって映画化されたものには、前に「モンパルナスの火」がある。シムノンは二十年以上の長きにわたってフランスの推理小説界をリードして来たが、半面最近映画化された「可愛い悪魔」のような心理的な愛欲小説も手がけており、また「殺人鬼に罠をかけろ」でもわかるように、彼の本領は推理小説といっても、いわゆる“頭脳の遊戯”式の謎解き風のものではなく、心理描写を主とした現実的な犯罪捜査風のもので、むしろ犯罪をめぐる心理小説とでも呼んだ方が適切であることは、この映画を見ても納得されるだろう。

脚色はシャルル・スパーク。今更いうまでもなく、デュヴィヴィエを始め、ジャック・フェーデ、ジャン・ルノワールなど、フランスの代表的な巨匠の作品の脚色を数多く手がけて来たベテランである。

登場する主要人物はミッシェル・シモンの演ずる人づきあいの悪い、風変わりな孤独な老人と、ポール・ベルナルの演ずるジゴロ風の美青年に、その恋人で彼のためにはどんなことも辞さないヴィヴィアンヌ・ロマンスの妖艶そのもののような女性の三人、それに、この映画の場合には群集が大きな役割を演じている。

物語も比較的簡単で、特に予め説明するまでもないと思われるものだが、ちょっとした事件が忽ち街中の話題になるような、物見高いパリの一隅、恐らくはユダヤ人街であるということ、この映画ではまず頭に入れて置く必要がある。そんなところだからこそ、人づきあいの悪い、何が本職かわからないような老人は、ふだんから周囲の人々にうさん臭い目で見られておりたまたま物盗りの殺人事件が起れば、疑いの目は一せいに彼に注がれるようになるのである。そうした情勢にヴィヴィアンヌ・ロマンスがたくみにつけこんで、愛する青年の犯罪をさもこの老人の仕業のように街中に思いこませてしまうわけだが、撮影当時三十三才、女盛りのヴィヴィアンヌ・ロマンスがそこはかたない媚態でミッシェル・シモンの老人に接近し、あらゆる世界からのけ者になっていた彼を有頂天にさせる過程の描写はなかなかの見ものだ。彼女のその策略が見事に成功し、街中の人々がこの老人を忽ち真犯人ときめこんでしまう、いわゆる“Whole Town's Talking”（街中の噂）の生れる過程の描写に対してもデュヴィヴィエの腕にゆるみはない。

どうも映画で見る限り、フランスの警察というものは甚だ心細く、また犯罪に対してもフランスでは科学的な調査より心理的な推測が先に立つように思われる場合が多いが、この映画もその例にもれず、警察の煮え切らなさに業を煮やした近所の人々は、よってたかって遂に老人をリンチ同然の惨めな立場に追いこんでしまう。このところの描写こそ、実はこの映画の最大の見もので、フランス映画は群集描写が苦手だという風評を完全に吹飛ばし、文字通り猛り立った群集の力の前に、思わず手に汗握る迫力に富んだ、デュヴィヴィエならではの鮮やかな技巧が見られる。

国立近代美術館フィルム・ライブラリー